ソ連・ロシアにおける日本文化の研究
――ユートピア学から現実学へ――

A・メシェリャコフ（A.MESHCHERYAKOV）
（ロシア国立人文学大学）

ユートピアは、主として二種類に分類される：それは空間的ユートピアと時間的ユートピアである。空間的ユートピアの古典的な例はトマス・モーアのユートピア島であり、ポリネシアも18世紀のヨーロッパ人にはそのような世界だと考えられていた。一方、はるか遠く過ぎ去った昔の「黄金時代」に理想を見出す社会もある（例えば、古代中国にとって聖君唐堯・虞舜の時代）。ソ連の公式的なユートピアも時間的の方に分類されるが、理想を未来に見出し、共産主義の建設を課題としていた。しかし、共産主義の理想に幻滅したソ連社会の一定層は、自分自身のユートピアを、時間的ではなく空間的範囲の中に探し求めた。

筆者がモスクワ国立大学を卒業したのは、1973年である。専門的に日本研究に従事しているうちに、この国への関心が常に増大していくのを感じずにはいられなかった。こうした日本への関心は、ブレジネフの「停滞の時代」にとりわけ顕著になった。職業的・創造的資質を発揮する機会に恵まれないという壁にぶつかった人々は、目を海外に向け始めた。米国及びその発展した消費社会は、多くの人々にとって実現された理想だと思われた。だが日本の場合は、関心の対象は経済的発展にとどまらなかった ― 日本の生活水準は米国よりもはるかに遅れていたからである。ソ連の知識人にとっては、何よりも文化が日本の魅力であった。筆者は、同い年の人々から羨望の目で見られていたが、それは高い給料を受け取っていたり、出世の見込みを有していた為ではなく、日本文化に接する機会を持っていた為であった。当時、「時事的な」研究に従事していない人々は、知識人層の間で大変尊敬され、現在の政治体制の反対派として見られていた。古代及び中世の文化に関するテーマは、こうした「反対派」の研究の筆頭であった。

ソ連時代後期、人々の世界観の構造において日本は非常に特殊な地位にあった。1970年代に日本語を学んでみたいと思う人（だがなかなか学ぶことができない人）の数が急激に増え、生け花や空手のサークルができ、日本文化に関する刊行物や文学作品の翻訳は信じがたい程の成功を収めた。とりわけ人気を博したのは、日本の古典詩歌（『万葉集』、『古今集』、芭蕉の俳句等）や散文（『徒然草』、

『枕草子』、『土佐日記』、『蜻蛉日記』、『伊勢物語』、『大和物語』、『二条物語』等）の翻訳であった。近現代の作家では、芥川龍之介、安部公房、川端康成、大江健三郎等が紹介された。禅宗に関する書物（例えば、鈴木大拙）の翻訳が地下出版され、手から手へと広まった。「わび」、「さび」、「悟り」、「俳句」という言葉は、いわば精神的な騎士団に所属していることの証になった。多くの知識人の頭の中には、日本の領土は無限に石庭でおおわれていて、日本の庶民は桜の下で人生の無常についての物思いにふけり、何かちょっとした機会があると和歌を詠む、というイメージがあった。

詩歌は、ソ連の知識人の言説において特別な地位を占めていた。論理的要素は弱いけれども、鋭敏な感受性や美的感覚が高く評価された。ソ連の知識人は、日本の詩歌の伝統が発達していることを知って、日本国民に対し敬愛の念を抱いた。

ロシア国民の文学的才能は、アネクドートやチャストゥーシカ（主として４行から成るロシアの民謡）に見事に体現されている。公式的な文化としては決して認められてこなかったこうした形式には、格言としての巧みさと短さが要求される。日本の詩歌はこれらの基準にかなっており、その短さは真面目な寸法に翻訳された。すなわち、尊敬される文学的形式として簡潔性が正当化されたのである。原則として客体を詳細に描写することができないこれらの詩は、お馴染みの「行間」を読む機会を読者に提供したのだが（ソ連の新聞を読む時も、全く同様のことを行っていた）、必要に迫られて行っていた屈辱的な習慣を創造的行為に高めたのである。日本詩歌の優れた翻訳家である V・N・マルコワは、「各々の詩は、小さな長詩である。それは熟考し、感情を移入し、心の中の目と耳を開くよういざなっている。鋭敏な読者は、詩の共著者である。想像の余地を与える為、多くの事が言い切らず、言い尽くされぬままになっている」[1]と述べていた。

ロシア語に翻訳された日本の詩は、実際以上に強い個性が付与されている。これは、ソ連のイデオロギーが、「公民としての自覚」を純粋な抒情詩にも要請していたことによる。日本の詩歌の叙事的、物語的な流れは、翻訳者にも読者にも何の興感も呼び起こさなかったことは注目に値する。ロシア語訳『万葉集』は、そのとても良い例である。非常に古い、時には半フォークロア的である８世紀の言葉が、20世紀の「普通の」詩に変化してしまったのである。

つまり、ソ連時代後期の知識人は、日本に対し非常に好意的なイメージを持っていた。その間、新聞雑誌及びラジオ、テレビは計画通りにストライキ、「春闘」、軍国主義の情報を流していた。しかしソ連のマスコミの公平性に対する信用は失われており、日本に関する否定的な情報は（決して全てが嘘という訳ではなかったが）

---

1 *Зимняя луна. Японские трехстишия и пятистишия в переводах Веры Марковой*. М., «Главная редакция восточной литературы», 1985, с. 5.

聞き流された。人々は、自分の国に関して正しい情報が与えられていないことを知っていた為、海外のニュースも不信の目で見るようになっていたのである。

その上、日本に対する敵対的なソ連のプロパガンダは、米国や西独、英国といった他国の「貪欲な帝国主義」を糾弾する時に特徴的な緊迫の度合いには決して達しなかった。さらに、プロパガンダの力の矛先は、当時ソ連と険悪な関係にあった中国にも向けられていた。つまり、日本に関してソ連の検閲はさほど厳重ではなかった。それに加え筆者は、ソ連の指導者は個人的に日本が気に入っていたと強く確信している。なぜなら、祖国で実現されていない理想 — 経済は発展し、市民は政府の方針に従い、若者は年配者を敬い、離婚が少なく、犯罪率も低く、個人的なことよりも社会的なことが優先され、ドライバーは交通ルールを遵守する — がまさに日本に見出されたからである。日本に「民衆文化」がなお生きていたことも、大きな意味を有していた：当時の日本人はまだ民謡を覚えていたし、自国の料理や着物を誇りにしていた。アメリカ化が進行していたにもかかわらず、彼らが自国の伝統文化を尊重していたことは明白であった。

以上の要因により、ソ連共産党に完全に手なずけられ、その一員となって日本についての書物を著した人々にも、日本やその文化、国民に対する愛情を公に表明することが許されることになった。そのような例が『桜の枝』である。同書はまず『新世界』誌（最もリベラルなソ連の雑誌）に掲載され、1971年に単行本化された。この本は大変な成功を収め、数回版を重ねることになった。著者は、『プラヴダ』紙（ソ連共産党中央委員会の主要な機関紙）東京特派員のV・オフチンニコフである。同紙で彼は日本の労働者階級の窮状や軍国主義について書いていたが、『桜の枝』では全く別の事 — 公式路線ではインターナショナリズムを掲げた国、あらゆる民族的差異の撲滅をユートピア的な課題としていた国において —、日本人の国民性を取り上げたのである。同書の成功は、著者の文学的才能の証というだけでなく、世間の期待の証でもあった。ソ連の灰色の生活に疲れて、人々はせめて別のところでは全く違う生活が存在してほしいと願っていたのである。

さらに、日本人がロシア人に対し肉体的な恐怖を与えなかったことも非常に重要であった。1904－05年の日露戦争やシベリア出兵は全く忘れ去られ、1945年8月のソ連軍による素早い満州侵攻はたやすい勝利であり、日本は弱いという印象を残した。アメリカ人及び西欧人の平均身長はロシア人より高く、ロシア人は肉体的な面で彼らに対し恐怖心からコンプレックスを抱いている。一方日本人は、身長がロシア人よりも低い（と思われた）為、肉体面において劣等感は持たれていない。ロシア人の頭の中で日本人は小さい人間と想像され、恐怖ではなく同情の念を呼び起こした。ソ連時代後期における日本及び日本人のイメージは、「女性的」要素が強かった。ソ連で人気を博していた平安女流文学が、その傾向を促した。日本人は、あまり攻撃的ではない存在のように思われた。第二次世界大戦中に日本軍が行った非人道的犯罪は、日本人が受身の、被害者の側になった広島・長崎における原爆の

悲劇によってかすんでしまった。被害者に対し無条件に同情することは、ロシア人の国民性の特徴である。

ロシア人と日本人が個人的なレベルで接触できる機会は極めて稀であり、日本に行った人はほとんどいなかった。上に挙げた全ての要因により、日本は恐ろしい国ではなく、神秘的で不思議な国だと考えられるようになった。漁師の会話を偶然耳にしたV・オフチンニコフは、「彼らの言語—より正確に言えば、言葉やフレーズを理解することに意味があるだろうか？彼らの思考様式は私には理解不能であり、彼らの精神はまだ未知の世界であることを、非常に悲しく感じる」[2]と嘆いた。これは同書だけでなく、当時の知識人の世界観にとっても鍵となる言葉である。著者には分からない漁師の会話に—異なるものへの希望、全く違う世界が存在してほしいという望みが託されているのである。

オフチンニコフの著書は、日本人の精神を分析する完全に本格的な試みである。著者は自らが直面している課題を、次のように理解していた：「今世紀初頭以来我が国では、このお隣の国民に関して良い点よりも悪い点の方が多く知られていた。それには理由があった…しかし日本人の気質のうち短所は90%知られているとすれば、長所はわずか10%しか知られていない。我々は、日本人が自国のシンボルに選んだ桜の花に、借りがあると認めなければならない。」[3] 同書が刊行された時期には、「帝国主義」諸国のいずれかの国民に対してこのような発言がなされると想像することは全く不可能であった。

傑出した作品（余計なファンタジーや不正確な記述はあるものの）の後では、それを模倣した二流の作品が山ほど出現するものである。日本に滞在することになった人は誰でも、日本についての神話に自分も何らかの貢献をすることを義務と考えた。「日本マニア」を賛美する書物が、V・A・プロンニコフとM・D・ラダノフ著『日本』（1983年）である。同書で著者は、学問的に問題を解明したと自負している（注釈で「本邦初の、日本人を社会心理学的に研究した書物である」とことわっている）。

本論で筆者は、こうした著者たちの多数の誤りを気にかけるつもりはない。筆者の課題は別の問題 — なぜこのような種類の著作が（本は多数の版を重ねた）読者の心をつかんだのかを明らかにすること、つまりソ連時代後期における文化的状況の若干の特徴を解明することにある。

最初に読者は、日本人を理解することは日本人にしかできないということを叩き込まれる。『日本』の著者たちは、「料理が出される間、芸者は冗談を言い、遊び、歌い、踊る。こうした全ての事がくつろいだ雰囲気を作り出し、気分を高揚させる。ところが、外国人には状況のニュアンスを完全には感じ取ることはできない、なぜ

---

2 Всеволод Овчинников. *Ветка сакуры*. М., «Молодая гвардия», 1975, с. 6.

3 Там же, с. 276.

なら日本語の微妙な表現や、発言の秘められた意味を理解する能力がないからである」[4]、「義理という言葉は、事実上翻訳不可能である」[5]と主張するのである。

理解できない事は（実際のところ、「理解できない事」でないのではなく、本当に「理解できない事」なのであるが）、当然のことながら「非合理的」という地位を与えられる。前掲書の著者たちは、日本国民は「無意識のうちに、生活の主要な原則として」[6]従っているのだと述べて、前述のような非合理性を公然と主張している。「神秘的な雰囲気が日本庭園の特徴であるが、それは庭園芸術の基礎を成すものである…日本庭園をどこか外国に移そうとしても、全くうまくいかないだろう。精神や雰囲気こそが、日本庭園には重要なのである。」[7]

しかし彼らは、このように日本人の精神が神秘的だと言うだけではやはり不十分だと分かって、宗教を引き合いに出している。ある国に固有の神秘的な文物を説明する為に、同じように神秘的な論拠を持ち出せば、叙述に面白みが加わると考えたのも当然である。「日本人の旺盛な知識欲は、思考様式が具体的であることによって運命づけられている。ここには仏教の影響も見られる。」[8] 仏教の哲学的体系に通じている者なら誰でも、仏教の思考様式が具体性を指向しているということには同意できないはずだと指摘しておこう。だがここでの退屈な生活とは異なる「ちょっと面白いこと」を探すあまり、冷静に評価したり因果関係を解明したりするのではなく、他国に固有な文物を皮相的に「神話化」するに至ってしまったのである。

上記に引用した『日本』の記述から、同書の著者が日本文化の独自性を認めていることは明白である。それ故、取り上げられる叙述の対象は、何よりもまず「我が国にないもの」という基準で選択される。すなわち、生け花、切腹、石庭、茶道、禅宗等である。日本人が他の国民と異なっている以上、女性も異なっているはずである。日本人自身ですら、次のような一般化を驚かずに受け入れると思われる：「日本女性は眠っている時ですら品位を失わない ― 慎ましく、お行儀よく、仰向けに寝て足を組み、体に沿って手を伸ばし、美しい姿勢で眠っている。」[9]

1970～80 年代は、日本人及び日本文化の独自性に対して注意を払うことを強調する（正しい時も、正しくない時もあったが）「日本人論」の最盛期であったことを想起する必要がある。これに関してはソ連の日本学者の多くが、本理論を説く日本人の熱心な弟子となった。自らが受けたソビエト・マルクス主義の教育においては、文化の独自性ではなく歴史的・文化的発達過程の普遍的な法則が強調されてい

---

4 В. А. Пронников, И.Д. Ладанов. *«Японцы»* М., «Наука», 1983, с.57.

5 Там же, с. 115.

6 Там же, с. 188

7 Там же.

8 Там же, с. 44.

9 Там же, с. 97.

たが、彼らはそれを忘れて「日本人論」の信奉者に飛びついたのである。ソ連の読者も同様に、こうしたソ連の日本学者を熱狂的に歓迎したのであった。

「我が国にないもの」には、単にエキゾチックで神秘的なものだけではなく、ソ連時代に著しく崩れてしまった生活様式の基本原則も含まれていた。『日本』の著者の意見では、そのような基本原則として何よりもまず以下の資質が上げられる：伝統の遵守、勤勉、規律正しさ、集団で協調した行動をとろうとすること、義務感、礼儀正しさ、倹約、責任感、家族が社会の基礎的単位としての機能を保っていること、である。

これら全ての「純日本的」特質は、実際にかなりの程度日本人に特有なものであり、ソ連人と比較すると際立ったコントラストを成している。もし「ソ連人」が上記の価値を原則的に否定していたとすれば、「我々とは異なっている」と結論づけるだけで話は終わったであろう。しかし問題はより複雑である。日本人に顕著に見られる資質は、ソ連時代後期の社会の公的な目標であり、理想 —革命後に失われた理想、それと同時に「明るい未来」に存在する理想 — であった。日本は、このような理想を持っている人々の理解では、現実に存在する空間（とは言え、明らかにおとぎ話の世界のような、ユートピア的な意味合いで描かれてはいたが）において既に夢が実現された場所であった。

日本は島国であるが、ロシア民話において「理想郷」は通常、島である。ロシア民話のキーテッシュ島、ラフマンスキイ島がこれに該当する。その上、18 世紀の民間伝説では、宗教の戒律がきちんと守られている「白水」の国が、「日本国」の岸に面した海にあると言われていた。

歴史はパラドックスに満ちているものである。日本についてのパラドックスは、18 世紀（20 世紀初頭でさえも）「逃亡者」が本当に白水の国へ逃避したいと望んでいたことである。ソ連の「停滞の時代」に関して言えば、物理的に日本へ到達する幸いに恵まれるとは誰も思いも寄らなかった。日本は、「心の中における亡命」のための国として考えられていた。

状況は、ソ連崩壊に伴って急激に変化している。日本及び日本に対する態度は、以前よりも現実的になった。これは、個人的なレベルで日本人に接触する機会が増大したことに加え、ロシア国内においてより多くの可能性が開け、人々がそれを実現しようと取り組みだしたことに起因している。その上、ソ連崩壊後の数年間は、物理的に生き残ることが緊要な課題であった。夢を見るための時間は、ほとんど残っていなかった。全般的な情勢の変化は、日本学にも影響を及ぼした。近年の具体的な研究については最近出版された書物に言及がある為[10]、本論では近年の日本学に見られる最も主要な傾向を述べるにとどめる。

---

10 法政大学国際日本学研究センター『ポスト・ソビエト期（1991－1994）のロシアにおける日本研究』、2005 年。

多くの研究において、日本の歴史や文化はもはや世界にアナロジーのないものとしては見なされていない。研究者たちは、日本の歴史・文化的発展過程の特殊性を認めながらも、日本を国際的な枠組みの中に入れて考察するようになり、比較文化的な研究が増えている。

「日本古典文学」という概念を、もはや日本語で書かれた文学の枠内には限定しなくなった。芭蕉は、以前はただ俳句のジャンルでしか紹介されていなかったが、今や漢文で書かれた作品も知られるようになった。平安時代はかつて、何よりもまず和文で書かれた女流文学の時代として知られていたが、今や研究者や翻訳者は男性の日記や上申書（三善清行『意見十二箇条』）、説話集（『日本霊異記』）も紹介するようになった。

かつては「二流」の作品と見られていた古典文学（『とりかへばや物語』、『無名草子』、『御伽草子』等）も、日本語から翻訳されるようになった。

ソビエト体制下ではタブーとされた、日本の宗教に関する本格的な研究（神道、仏教、日本における正教の歴史）がかなり広く紹介されるようになった。

ロシア人研究者が取り組んでいる新しいテーマとして、歴史地理学、視覚文化、空間的及び時間的方位（方忌や物忌）、近代化の問題、といった研究対象が挙げられる。

欧米とは異なった、ロシアに特徴的な状況であるが、日本古代の記念碑的作品に関する研究書や出版物が重要であり続けている。現在のところ『律令』、『古事記』、『日本書紀』、『続日本紀』、『風土記』、『古語拾遺』、『藤原家伝』、『新撰姓氏録』、『万葉集』、『懐風藻』等のロシア語訳がある。

近年、ロシアにおける日本研究の質は確かに向上した。だが同時に、日本についての研究書の発行部数が急激に減少してしまったことを指摘しなければならない。「日本研究のベストセラー」である『日本のシンボルに関する本』[11]は３年間で４回版を重ねたが、発行部数の合計はわずか１万部に過ぎない。ソ連時代には、日本文化に関する書籍は数万部、数十万部も売れたものであった。これは恐らく、日本学がユートピア学から現実学に移行した代償であろう。

（原文ロシア語、日本語訳・土田久美子）

11 А.Н.Мещеряков. *Книга японских символов*. М., «Наталис», 2004.